

語る力と仮構力

—— 酒井耕・濱口竜介監督の東北記録映画三部作

山根貞男（映画評論家）

酒井耕と濱口竜介の東北三部作では、何人もの人がつぎつぎ登場して自分の体験を語り、その前後に、走る車の中から捉えた風景の断片が入る。語る人と風景。その組み合わせは、三作品とも基本的に変わらない。そっけないほど単純なスタイルだが、躍動感にあふれた時空がくりひろげられる。

第一作『なみのおと』と第二作『なみのこえ』では、さまざまな世代の男女が東日本大震災の体験を語る。恐怖が生々しく伝わってくるなか、被災者同士の対話であれ、作り手によるインタビューであれ、多くの人が、にこやかに、信じられないほど滑らかに話すことが印象深い。最初は言葉に詰まっていた人も、言葉を重ねるうちに、どんどん軽やかになってゆく。その場合、話される内容が体験なのではない。それが語られ方と一体化することで、体験という事件がスクリーンに現前するのである。

その勢いに耳目を集中するうち、ひとつのことに気づく。カメラの位置が、どう考えても、普通にはありえない。わ

ざとらしきなど微塵もないまま、カメラが不思議な位置に置かれており、事件の迫力はそのことも加わることで強まる。

同じ東日本大震災とはいえ、だれもの体験が同一であるわけではなく、人によって異なる。微妙な違いかもしれないが、その微妙さは途方もなく大きい。そうした体験の個性が、声や表情や語り口の固有性ととも浮かび上がってくる。そのとき、ここを強調したいが、物語るとは仮構力を伴う営みであり、語りの滑らかさはその発現なのではなからうか。

第三作『うたうひと』では三人の老人が地元の伝承ないし民話を語るが、あり方は前二作と変わらない。生活の底に堆積された物語が、固有の語る力と仮構力により事件として現前する。

語り+手法→事件。東北三部作におけるこの動きのスペクタクル的な魅惑は、映画の原理からやってくるのにちがいない。

■上映

『なみのこえ』 [IC] 10/12 16:30- [A6] | 10/14 14:30- [CL]
『うたうひと』 [PJ] 10/13 10:00- [F3] | 10/14 18:50- [F4]